

第3回 市民参加の仕組みづくりのための検討会

会 議 録

日 時：2025年12月9日（火）午前9時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 5号会議室

◎開 会

○事務局（藤田推進係長） お時間となりましたので、第3回市民参加の仕組みづくりのための検討会を開催いたします。

事務局の藤田です。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事です。

ここからは、座長に進行をお願いしたいと思います。

鈴木座長、よろしくお願いいたします。

1. 議 事

○鈴木座長 皆様、おはようございます。

これより、私、鈴木が進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります。

前回9月11日開催の第2回の検討委員会では、10月に開催の市民ワークショップの進め方や内容などについて意見交換を行いました。

本日は、次第にございますように、まず、（1）市民ワークショップの結果についてご報告をいただき、その後、今後の仕組みづくりにどう反映させていくかなどを議論していきたいと思います。

それでは、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 事務局の寺川でございます。本日もよろしくお願いいたします。

それでは、資料に沿ってご説明をさせていただきます。

資料1をご覧ください。

まず、ワークショップの全体像から改めてご説明いたします。

左側の開催概要をご覧ください。

目的ですが、20年から30年先の雪対策のあるべき姿について市民議論を行い、雪対策審議会や市民会議の基礎資料として活用すること、そして、多様な意見を引き出す議論のフレームを構築することの2点でございます。

名称は雪対策の未来を考える市民ワークショップ、日時は10月19日曜日の1時から5時半まで開催いたしました。

一つ飛ばして対象ですが、10代から70代の市民50名を選出し、当日は43名に参加していただいたところでございます。

続いて、選出方法ですが、住民基本台帳から3,000人を無作為抽出して案内状を送付し、応募者の中から属性バランスを考慮して決定する方式を取りました。

一つ飛ばして論点と問いでございます。

今回は、三つの論点があり、1点目は、限られた資源で何を優先するのがよいか、2点目は、雪をどう受け入れ、どう支え合うのがよいか、3点目は、大雪の日の暮らし方のルールというものを設定して、それにひもづく形で複数の問いを設定しています。

続きまして、中央の当日の流れをご覧ください。

上から太字部分を読み上げさせていただきますが、まず、受付と情報提供から始まりまして、同世代のディスカッションと質疑応答、それから、多世代でのディスカッション、そして、振り返りとアンケートという流れで実施いたしました。

その右隣をご覧ください。

上から順に、アンケート調査では、左側にT1、T2、T3と表記をしていますが、3回の調査で意識の変化を測定しております。

それから、情報提供につきましては、人口減少、本市の財政状況、雪対策の現状や課題につきまして、スライドを用いてご紹介しました。

そして、同世代のディスカッションでは、「雪のある暮らしとその先の未来」をテーマといたしまして、世代ごとに雪のある暮らしのプラス面とマイナス面を共有し、今回は四つのシナリオを用意しておりますけれども、そちらの支持理由を話し合って、大切にしたい方向性をま

とめていただきました。

その後、多世代でのディスカッションでは、「市民ができること・市ができること」をテーマに、各世代の意見を持ち寄りまして、大雪のシチュエーションにおける市民と行政の役割分担を議論いたしました。

そして、最終的に、雪と共生する20年から30年後の未来像をまとめていただいたという構成です。

それから、一番右の部分をご覧くださいまして、今回、新たな工夫として、前回会議でお示しさせていただきましたとおり、サンドイッチ構造とハイブリッド対話を採用しました。

サンドイッチ構造につきましては、参加者の自由な発想を尊重しつつ、正確な情報提供をしまして、現実と向き合っていたいただいた上で、制約の中で現実的な方策を考えていただくというプログラムです。

ハイブリッド対話につきましては、まず、同世代で議論をしていただいて、生活実態やニーズを掘り下げた後に、多世代で異なる年代の価値観をすり合わせて、多角的な視点から課題を捉えていただくという対話の手法です。

こうしたプログラム構成によりまして、各論点を深めることを狙いとして開催いたしました。

2 ページ目をご覧ください。

申込みの状況についてご説明いたします。

左側の概要欄をご覧ください。

無作為抽出により選出した札幌市民3,000名へ案内を送付し、結果としましては、86名の方からお申込みをいただきました。

特徴につきましては、右隣の中央のグラフと併せてご覧いただきたいのですが、まず、年代ですが、10代、20代の若年層と70代からの申込みが少ない傾向が見られました。

応募理由ですが、雪対策に日頃から関心があるが4割を占める一方で、意見をふだん伝える機会がない、時間に余裕があったからといった層からの参加も一定数確認されたところです。

それから、若年層の参加促進が課題という右側の欄をご覧ください。

こちらは、過去に実施してきたワークショップでは、若年層の申込率が低調でしたので、当課で実施した直近3回のワークショップの実績を参考に、今回、試行的に年代ごとの申込率が一定となるように案内を送付しました。

具体的には、10代から20代を厚めにお送りしたということになります。

結果としましては、過去よりもさらに、20代以下の申込率が低かったという状況です。

年代ごとの申込率につきましては、下表に記載のとおりです。

こうしたことから、テーマに応じて若い世代が参加したくなるような工夫や、若年層のみを対象とした意見聴取の機会を設ける必要があるということが明らかになっております。

雪対策の取組に関しましては、これまで実施してまいりましたアンケートなどにおきましても、若年層の回答数がほかの世代より少ない状況でしたので、大学生を対象としたワークショップを開催することによりまして、補完する形で意見を収集してきたところでございます。

また、広報さっぽろのほかにも、札幌市のインスタグラムによりまして、これまでのアンケート調査やワークショップの様態を取り上げ、幅広い世代への情報発信にも取り組んでいる状況です。

3 ページでございます。

参加者の属性についてご説明いたします。

左側の概要をご覧ください。

10代から70代の市民43名がご参加されました。欠席は計7名がいらっしゃいまして、10代がお1人、40代から60代が各2名という状況でございます。

特徴としましては、まず、居住形態ですが、集合住宅にお住まいの方が58.1%、戸建てが41.9%という状況でございます。

それから、積雪寒冷地での居住年数は、20年以上の方が多く、長く積雪寒冷地に住んでいる方が中心のご参加となっております。

そして、冬季道路環境への満足度もお聞きしております、どちらとも言えないが半数以上を占めていたのですけれども、不満か、満足かという点から見ますと、不満を持つ方のほうが多く、3割程度が確認されております。

市政に意見を言う頻度も調査をしておりますけれども、全く言ったことがないという方が約半数いらっしゃる状況でした。

また、日頃から雪対策に関心がある方が多いということを先ほど申しあげましたけれども、参加者におきまして、日頃から関心があるという方が半数程度いらっしゃいました。

このように、長く積雪寒冷地に住んでいらっしゃる経験から、雪対策にご関心があったり、課題を感じていらっしゃる層が中心となってお参加をいただいたと捉えております。

4ページでございます。

まず、三つの論点のうちの一つ目の結果についてご説明いたします。

論点の一つ目は、限られた資源で何を優先するのがよいかでございます。

左側の設問の欄をご覧ください。

2問がございまして、まず、1問目は、今後の札幌の雪対策が目指す四つの方向性（シナリオ）をお示ししておりますけれども、そちらについてお聞きします、という内容です。

それぞれの方向性が掲げる目指す姿と課題をご覧の上、どの程度賛成するかということを7段階で評価していただきました。

それから、下の欄の間2ですが、四つの方向性のうち、まず、優先して進めるべきものを一つだけ選択していただくという問いでございます。

中央の結果の欄をご覧ください。

上のグラフがシナリオへの賛成度、下のグラフがシナリオの優先度を選択していただいたものでございます。

まず、上のシナリオの賛成度をご覧ください。

Aは快適性優先、Bは地域で支え合う、Cは技術に投資、Dは行動、意識を変えるというシナリオでございます。

グラフは、情報提供の前後と議論後の調査における変化を示しているものです。

結果としまして、緑色のDの行動、意識を変えるが、当初は最も低かったところ、議論を経て増加をしまして、最終的には最も高い賛成度となっております。

それから、下のシナリオ優先度をご覧ください。

優先度の設問では、議論前は、青色のAの快適性優先が最多でしたが、徐々に減少しまして、議論後には、緑色のDの行動意識を変えるが最も支持される結果になっております。

オレンジ色は、Bの地域で支え合うですが、こちらは情報提供後に支持が低下しましたけれども、最終的には増加をしております。

そして、グレーのCの技術に投資も3割近い支持を最終的には得ておりまして、先端技術の活用への期待もうかがえる結果でございます。

参考に、資料の右下をご覧くださいまして、市民ワークショップの前の10月7日に北星学園大学にご協力いただいて実施したワークショップの結果を掲載しております。

大学生を対象として、同じような題材でワークショップを開催したところ、調査に参加していただいた9名の学生の方は、シナリオ優先度につきまして、当初、青色の快適性優先を重視する意識が高かったところ、最終的には、グレーのCの技術に投資と緑色のDの行動意識を変えるを支持するに至りました。

参考までに、ご紹介させていただきます。

以上、論点①に関する調査につきましては、行動・意識変容を優先するべきという意識が高まったことがポイントだと捉えております。

5ページでございます。

論点の二つ目ですが、雪をどう受け入れ、支え合うのがよいか、雪対策の資源配分についての問いでございます。

左側の設問をご覧ください。

問3では、将来、担い手や予算が今よりも限られた場合の雪対策に関する資源をどこに重点的に配分するのがよいか、最も近い考えの一つだけ選んでいただきました。

下の問4では、大雪が降った後の日の除雪作業について、限られた時間と人員の中で、どこを最優先に作業を始めるべきか、一つだけ選んでいただきました。

中央の結果をご覧ください。

上のグラフが資源配分の考え方、下のグラフが大雪直後の優先作業でございます。

まず、上の資源配分の考え方をご覧ください。

議論後には、緑色の現状のバランスを維持が最も高い割合を示しております。一方で、青色の幹線道路への配分を重視する意見がもともと43.9%ほどあったのですが、これが減少したという結果になっております。

そして、グレーの生活道路を重視する意見が大きく増加していることが特徴として挙げられます。

下の大雪直後の優先作業をご覧ください。

青色の幹線道路の除雪が最も多いという傾向は一貫しているのですが、資源配分の考え方と同様に、グレーの生活道路を重視する意見の増加が見られたというのが特徴です。

このように、資源配分では、現状のバランスを維持というのが最も支持される結果となり、大雪直後は都市機能の確保を優先する、幹線道路の除雪を優先するという考えが多く占めましたけれども、共通して、生活道路への意識の高まりも確認されたという結果でございます。

6 ページです。

論点②の続きで、地域支援メニューです。

左側の設問をご覧くださいまして、問5では、地域を支える支援メニューについて、それぞれの優先度を7段階で評価していただきました。

問6では、支援メニューのうち、まず充実させるべきものを一つだけ選択していただいたというものです。

中央の結果をご覧ください。

上のグラフが地域支援メニューの賛成度、下のグラフが、まず充実させるべき地域支援メニューでございます。

上のグラフですが、提示させていただいたメニューが5点あり、これらにつきましてはおおむね高い賛成度が示されておりますけれども、特に、オレンジ色は除排雪体制の確保、緑色は除雪ボランティアへの支援というもので、これらの賛成度が高い結果となっております。そして、青色の雪置き場の確保が横ばいだったということも特徴として挙げられます。

下の、まず充実させるべき地域支援メニューでございますが、オレンジ色の除排雪体制の確保が約4割を占めているという状況です。

議論の前には青色の雪置き場の確保が上位だったのですが、最終的に支持が低下しております。そして、緑色の除雪ボランティア支援の支持が大きく増加をしたという結果となっております。

このように、議論後は、場所や除雪用具の貸出しなどの物に対する支援よりも、ボランティアへの支援や除排雪体制の確保を支持する傾向が見られました。

次に、スライドの7ページでございます。

論点の三つ目、大雪の日の暮らし方のルールについてです。

左側の設問をご覧くださいまして、問7は、大雪や異常気象時の社会全体の対応についてどの程度賛成するかを7段階で評価していただきました。

問8では、問7の取組を実施するきっかけ、条件として最も適切だと思うものを一つ選択していただきました。

中央の結果をご覧ください。

まず、上の社会ルールへの賛成度ですが、当初、緑色の会社や学校が基準を設けて休むへの賛成が、ほかの時差出勤や在宅勤務の選択肢よりも低かったというのが特徴ですが、議論を経て、最終的には、ほかの項目と同程度まで上昇したという結果になっております。

参加者の方には、学生や働いていらっしゃる方が多く参加されていまして、当初は恐らく休むことへの抵抗感もあったと推察されますけれども、議論後には、大雪の日に社会全体で休むということへの理解が高まったものと考えております。

下の社会ルールの適用条件ですが、青色の大雪に関する気象情報の発表の支持が一貫して4割程度を占める結果となっております。

一方で、オレンジ色の幹線道路で深刻な交通障害が発生を支持する層が大幅に減少しておりまして、右側の濃いほうの緑色ですが、市が外出自粛を要請というものが増加した結果となっております。

これらの結果から、事後的な対応、交通障害などが発生した場合よりも、未然防止の段階、気象情報の発表、行政からの公式な要請を基に都市機能が麻痺することを防ぐことが求められているものと推察したところでございます。

8ページでございます。

運営に関する評価についてご説明します。

情報提供後とワークショップ後に、それぞれこちらに記載のとおりの評価項目を評価、測定をしたところでございます。

やや細かくて恐縮ですが、左側に三つの分類、その隣に評価の項目、右側には7段階評価の結果と平均値を示しております。

上から順にご説明させていただきますが、まず、情報提供に関する項目では、事前に1週間程度前に資料を送付しておりまして、これを情報共有ノートと呼んでおりましたが、そちらや、当日の情報提供について評価をしていただきまして、一番右に平均値を記載しておりますけれども、いずれも5.5点から6.0点という評価になっております。

上から3項目めが、情報提供のバランスに関する評価でした。

この点は、昨年成人式のときの市民会議で課題となっておりましたが、今回は、情報提供の材料としてシナリオを取り入れるなど工夫をしました結果、及第点だったと捉えております。

次に、意識変化に関する項目です。

太字部分の特に担い6.3点ということで、ほかの項目よりは高い評価でございました。そのほかの項目は5.5点から6.0点という平均値になってございます。

次に、運営全般に関する項目については、薄い青色の網かけ部分が平均値で6.0点以上の評価となっておりますが、内容としましては、ファシリテーターが中立的な立場で進行していくというものの、それから、下の三つは同世代のグループでの話し合いに関する項目でございまして、いずれも高い評価になっております。

注目されるのは、同世代と多世代を比較しますと、多世代のグループの議論は平均値で6.1点以上の評価になっているものの、同世代よりも低くなっているという点でございまして。これは、ディスカッションのテーマ自体が異なるということもございまして、現場で観察をしていた限りでは、少なからず世代間の意見の違いも影響したものと感じております。

最後に、表の最下部に太字の3項目を記載していますが、そちらをご覧ください。

ワークショップ全体に対する満足度が平均値で6.3点、それから、また同じようなワークショップがあれば参加したいかという問いには6.4点という平均値でございまして。

また、一番下ですが、今後、自分の生活や地域で雪対策に協力、行動したいという意識になった方々は5点以上を選んだ方が9割以上いらっしゃいまして、こうしたワークショップに参加することで、雪対策の課題を自分事として捉えて、協力、行動したいと思うきっかけにもなり得るというのが貴重な発見であったと考えているところでございます。

続きまして、9ページでございます。

ワークショップで出していただいたアイデアについてご説明をいたします。

左側の表をご覧ください。

主なアイデアを分類して整理していくという資料ですが、アイデアのうち、括弧の中に「市」とか「大」という記載があります。「市」は今回の雪対策の未来を考える市民ワークショップで出されたご意見で、「大」は北星学園大学の学生から出していただいたアイデアを参考に示しているものです。

上から順にご説明いたしますが、まず、上から二つのアイデアは、大雪時は無理に出勤、登校せず、オンラインに切り替える、学校の冬季休業期間を長く設定するといったアイデアで、資料の中央部分で、柔軟な社会活動への転換というものに分類したところでございます。

その下の二つですけれども、気象情報を合図として一斉に行動を判断する、企業や学校に明確な休みの基準を設けてもらうというアイデアが出されておりました、行動基準のルール化に分類したところでございます。

それから、次の三つですけれども、除雪支援が必要な人と支援できる人をアプリなどでマッチングする、除雪を通じた雪コミュニティづくりといったアイデアが出されておりました、住民同士の支え合いの仕組み化に分類しております。

ここで注目されるのは除雪のマッチングに関するアイデアでございまして、今回の市民ワークショップでは7グループを構成したのですが、そのうちの四つのグループからこうしたマッチングに関するアイデアが出されておりました。

さらに、北海道大学や北星学園大学で実施したワークショップでも同様のアイデアが出されている状況でございます。

こうしたことから、このマッチングに関するアイデアにつきましては、世代ですとか属性といったものを超えて共感を得られるような仕組みであると考えているところでございます。

次に、その下の三つですけれども、除雪を腰を痛めないスポーツとしてイベント化する、フィットネスにするという意見や、大学の授業で雪かきを行って活動実績を単位として認定するといったご意見もございまして、参加する動機の確保に分類しております。

その下の三つですが、家庭用小型自動除雪ロボットの導入やAIに関するアイデアでございまして、AI、技術革新による省力化に分類しております。

残りの三つは、雪をエネルギーとして活用し経済価値を生む、ロードヒーティング、融雪槽などのインフラの整備といったアイデアが出されておりました、雪資源の活用、インフラの整備という中分類にしております。

最終的に右側にイメージ図を記載していますが、三つの方向性に集約されるものと考えております。

一つ目が意識・行動変容、二つ目が支え合う仕組みということで、これに関しては、誰もが参加しやすく持続可能な助け合いの仕組みを構築するという方向性で考えられると思っております。

三つ目は先端技術の活用でございまして、人手不足を先端技術を活用して補うという方向性です。

以上の三つの方向性にまとめましたが、重要な点としましては、担い手不足や予算の制約といった現実的な課題を理解していただいた上で対話を通じて導き出されたという点でございまして、今回のワークショップの大きな成果であると捉えているところでございます。

最後はまとめの資料です。

論点を左側に三つ記載しております。

中央に、参加者の意識の変化や主なアイデア、右側に雪対策の未来像のイメージを記載しております。

簡単にまとめさせていただきますけれども、まず、論点①につきましては、議論を通じて行動・意識変容が最も支持されまして、地域で支え合うことや、技術に投資への期待も高まったという状況でございます。

市民の行動変容を基盤としながらも、地域の支え合いと先端技術を組み合わせた多角的なアプローチが必要という結論になったと考えております。

論点②ですが、生活道路への資源配分を求める声が増加したのが特徴でございまして、特に除雪ボランティア支援への支持、アイデアのうちでこれが急増したところでございます。地域住民同士が支え合う仕組みの必要性が認識されまして、誰もが参加しやすく、持続可能な助け合いの体制づくりが求められていると考えております。

論点③は、会社や学校が基準を設けて休むへの賛成が議論を経て上昇しました。大雪の日は無理に外出せず、社会全体で活動を休止するということへの賛同が高まったと考えております。

適用の条件としましては、気象情報の発表を重視する意見が約4割を占めまして、事後的な対応よりも予報の段階での未然防止を求める姿勢が明らかになったと考えております。

最後に、右側の雪対策の未来像ですが、調査の中から得られた参加者の意識と、先ほどの

ページでご説明しました多様なアイデアを集約した結果、これら三つの方向性をバランスよく組み合わせるということがワークショップで得られた雪対策の未来像でございます。

以上がワークショップの結果をまとめたものです。

ご報告してまいりましたとおり、今回、新たにいろいろと工夫を取り入れたことで、結果として参加者からおおむね高い評価を得られた結果になっております。そして、具体的で多様なアイデアも引き出せたと考えているところでございます。

委員の皆様には、20年から30年先の雪対策のあるべき姿について、ワークショップのこの結果に関するご意見やご感想、そして、議論のフレームとして評価などを頂戴したいと考えております。

最後に、今後の予定についてですが、今回のワークショップの概要につきましては、活用する方法として、広報さっぽろ、インスタグラムなどを通じまして周知を図ってまいりますとともに、次回開催予定の雪対策審議会にもご報告させていただきたいと考えております。

加えまして、年が明けて2月の末頃に、再度、ワークショップを実施したいと考えておりまして、その場では、雪対策の課題などをさらに深掘りしていきたいと思っています。

その後は、市民会議をミニパブリックス形式で実施することも計画していきたいと考えております。

説明は以上です。

○鈴木座長 ただいま、市民ワークショップの結果についてご報告いただきました。

ただいまのご説明に関しまして、委員の皆様からご意見やご質問があれば頂戴したいと思います。

皆さん、いかがでしょうか。

○梶井委員 最初の発言で褒めてしまうと後の方から批判意見が出にくくなるのではないかとと思うのですけれども、これは期待以上の成果が出たのではないかと思います、びっくりいたしました。

特に、ワークショップでの議論後の変化がすごいですよね。

「行動とか意識変容を最優先すべき」というのは一番選ばれない選択肢だと思うのですが、それが議論後にすごく上がってきたところは、この結果にも出ているように、議論が非常に充実していたという議論に対する評価も高かったことと関連していると思いました。

それから、三つの論点と四つのシナリオは相当練られたものだと思うのですけれども、三つの論点と四つのシナリオという情報提供のコンテンツも優れていたのではないかという感想を持ちました。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

○山崎委員 今、梶井委員からお褒めがあったのですが、実際にワークショップをご覧になった事務局として、どこが勝因だったとお感じになっているのでしょうか。

定量的に振り返る分析は8ページにも出ているけれども、どこが効いたのかという定性的な振り返りを加えてください。情報提供がよかったのか、ファシリテーターがよかったのか、そうした見識のある市民の方々がちゃんとしているのだというところにあるのか、なぜうまくいったのかというところを定性的に振り返ってみるとどういったことが言えるのか、コメントをいただけるとありがたいです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 調査の中でアンケートの自由記載欄などを拝見しますと、こういうワークショップに初めて参加してすごく勉強になったという意見もありましたし、ワークショップの中で議論することで本当に意識が変わったと書いていただいた方もいらっしゃいます。また、こういうふうに意識を変化させていくことが大事だと思ったと具体的に書いていただいている方もいらっしゃいました。何が要因なのかというところは明確には分かりませんが、総合的に、ワークショップを経験されたことで、議論を通じて意識が変わっていったということは自由記載からも確認できております。

また、同世代と多世代で比べてしまうのはよくないかもしれませんが、同世代で議論されている様子を拝見しますと、少しリラックスして、お互いが意見を言いやすい雰囲気ではあったかなと思っています。一方、多世代では、同世代のディスカッションと比べますと、意見の衝突も見受けられましたので、このワークショップを通じて、多様な参加者といろいろな経

験を共有されたということが分かってきております。

○山崎委員 今までやってきたことが成果につながるというのは非常に画期的なことであると改めて認識しました。

そうしたところで成果を実感するとともに、これは先々の話ですが、こうした人たちが札幌市民の絶対数に数多くいれば大変よいのですが、分母が3,000人で、実際にワークショップに来てくれたのが40～50人ですから、積極的な市民の方々の数はそうでもないというのがこれからの課題です。

そこをどうしていくべきかについては、またこの場でも考えていかなければいけないと思いますし、これからの課題として認識したところです。

○鈴木座長 私もワークショップを見学させていただきましたけれども、今回のワークショップは、いろいろな情報提供とか、前回の成人式を踏まえて少し改善したということもあります。仕立て方といいますか、全体の企画もよかったと思います。

それに加えて、今回の雪対策は、それぞれの生活に密着したテーマですし、冬を迎えるに当たって、いろいろな方々の経験から生活にも影響するという意味で、今回は意見も感想も結構出されていますし、みんなで考えていこうという雰囲気があったと思います。

もう一つは、今回、シナリオの設定がよかったと思っています。やり方の方法の選択だけではなくて、行動変容、技術の投資、地域で支え合う、そのように自分たちがどう向き合っているのか、そういったシナリオが用意されていたので、今回、ワークショップで多世代なり大学生の意見もありましたけれども、自分たちの目線でいろいろと考えられたというのがよかったと思っています。そういったものがこういう結果に出たのではないかと感じております。

三上委員も見学していましたが、何かご感想があればお願いしたいです。

○三上委員 私も見学させていただきました。

札幌市にも意見出しやメモは全部差し上げたのですが、うまくいった理由としては、全体感として、参加者皆さんが椅子の背にもたれることなく議論に参加し、前のめりの参加が目立ちました。本当に参加の意識が高かったと思います。

また、テーブルファシリテーターも、専門業者の方でしたので、議論、ワークショップに比較的慣れていたというのがよかったと思います。

それから、プログラム自体の成功としては、同世代の議論を実施してリラックスしてもらい、自信を持って多世代でミックスで議論してもらったということで、後半のミックスのときも、若い方も、各グループでの発言率が高かったかなと見ています。いろいろ観察しましたが、若い方もちゃんと意見を言っていました。心理的安全性がないと若い方が口籠もってしまうパターンがありますが、それはなかったと思いました。ですから、議論が比較的活性化されていたと思います。

もう一つは、3回アンケートを取ることで意識変容を自己認識させたというやり方がよかったと思います。我々も2回目（1回目は成人式のワークショップ）になりますけれども、よかったと思います。

自分が変わっていったことを頭の中で言語化したり、言語化ができなくとも選択して自分の意識をはっきりと表出することが大事なので、3回のアンケートでその自己認識をさせたことで、アンケートでも自分が変わったとはっきりと言えたのかと思います。

3つ目の成功要因として、実施時期が、雪の経験をしたときから一番経過し、忘れてしまっている時期にやったというのが要素としてはかなり大きいです。もし2月や3月にやると、トラウマになるぐらいの大雪を体験した後であれば、もしかしたら参加者の議論の内容も変わるかもしれません。

その結果として、最近リアルに大雪を体験した、という状態での議論になると、結構強めの意見が出ると思うのです。

ただ、その中で、選択式になっているシナリオが、一つだけ選んで事が済むわけではないという立てつけになっていたところも非常にいいと思いました。この、ミックスして対応していかなければ世の中はうまく進みませんよ、というシナリオを幾つか出したところよかったと思います。そうすると、意見が違っても、「ああ、それもあるよね」「でも、これも大事だよね」と、市民同士の議論が活性化される仕掛けになっていたと思います。

実際の実務でいけば、これだけ選べばいいというものはないので、どれを選んだらいいかということ聞きながらも、ミックスでなければ世の中は成り立っていかないのではないかと、妥協と、自分の利益と他者の利益を両方大事にするという気持ちを醸成させたと思いました。

もう一点、この機会に申し上げさせてください。

8 ページのアンケート結果の評価測定をもう少し深掘りしたほうがいいと思いました。

なぜかという、よかったところは7段階で右側に行けば得点が高いのはいいのですが、実は、ワークショップ自体のやり方をチェックするには、1点をつけた方、もしくは4点から下ですね。日本人は平均が大好きなので、人を傷つけないためには不満があっても大体は4点をつけるものですから、4点以下が多いところは少し危険の要素もはらんでいると思います。

例えば、アンケート項目「運営全般」の「多世代」のところで、「グループは安心して発言や意見交換ができる居心地のよい雰囲気であったか」という問いで、1点のところに5人がつけているのですが、これを5人もいたというふうに見るのか、ただ、この5人は同じグループの可能性もありますし、もう少し内容の分析が必要かなと思いました。（補足：正しくは5＝5%であり2名に相当）

当日の会場では、私から見て右から2番目のグループは、一番若いくらいの方と50代くらいの方がかなりハードな議論をしていた場面がありました。ここのファシリテーターは柔和で進め方が非常にうまくて、見ていた中では1番、2番くらいに優秀な方だったのですが、若い方が無責任な発言を指摘したような場面があったのです。そこで、今まで温かったのが急に冷たくなって、雰囲気が一変して凍ってしまったかなという場面があったのです。それは多世代での議論の場面です。

もしかすると、この5人というのはそのグループの方かもしれないのであれば、そのグループに何か問題があったというふうには分析しないと、それだけで今回のワークショップは全般的に多世代のほうに少しやりにくかった、悪い雰囲気だったと評価されるのはまずいと思いました。そこは、グループなのか、個人なのか、どんなことがあった結果としてこの意見になったのかというのは、ワークショップをした業者とテーブルファシリテーター、メインファシリテーターを含めて分析したときに分かります。

そこは、心理的安全性への取組ということで、例えば、多世代のところは初めにアイスブレイクをやっていなかったのです。そこはもう少しアイスブレイクをするようにすることで解決がされると思います。

そういう観点で1点という極端な点をつけているところは、もう少し分析したほうがよいと思いました。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

○片山委員 丁寧な分析をどうもありがとうございます。

私は設問のつくり方の想定を忘れてしまっていると思うのですが、5ページの雪対策の資源配分と大雪直後の優先作業のところで、「幹線道路を最優先」というのが若干少なくなって、「生活道路を最優先」が増えているのですが、これが増えた前提として参加者は何を考えたのかがよく分からないのです。「生活道路を最優先」にしたとしても、その先が詰まっていたら会社にも学校にも行けないのではないかと思います。

私としては、生活道路のほうは地域が連携して自分たちでやるというふうを考えて幹線道路のほうを優先するというのが増えるのかなと勝手に想像していたのですが、それが逆だったということの背景として、皆さんはどういうことを想定していたのか、もし理解されていたら教えてください。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 鋭いご質問をありがとうございます。

ここは事務局でも議論したのですが、明確には分かりませんでした。

ただ、一つ考えられるのは、結果を通して見たときに、これは資源配分なので、例えば、限られた人、時間、予算をどこに配分するかと考えたときに、下の大雪直後は、都市の活動がストップしてしまうので、これは幹線道路を優先するというのが基本的な考え方だと思います。一方で、平時のときは、ボランティアの支援が支持を伸ばしたり、地域の雪対策の体制の整備の支持が高かったことを考えますと、生活道路も市民や地域が協力して作業をするので、

そこにも予算とか資源を投入してもらえないかという要望のようにも捉えられると感じました。

ただ、先ほど申し上げたとおり、明確には分らなかったもので、あくまでも想像でございます。

○梶井委員 私も同様の疑問を持ったのですが、最終的に「行動変容をして学校も会社も休みにしたほうがいいのではないか」という大胆なところが支持されていることを踏まえて考えると、「もう無理して会社や学校に行かないで、でも、生活のためにコンビニなどへは行かなければいけないので、生活道路優先」というような意識変化に連動しているのかなと勝手に解釈しておりました。

○鈴木座長 私もそう解釈していました。買物とか、通院とか、近く的生活圏のほうを少し優先するというようなイメージかなと思っていました。

ほかに何かございませんか。

○大村委員 4 ページの結果のところでは印象的だったのが質問の2 番目です。地域で支え合うという項目が、一度、情報提供後に支持が低下したけれども、最終的に、議論後には1 回目よりも増加しているという結果があると思います。逆に、その右側にある大学生だけのワークショップでは、地域で支え合うの支持が最終的には減ってゼロになっています。多世代での議論の中で、実際に地域で活動されている方々の意見によって、若い世代が現状のリアルな声を知って支持されたのかなと読み取ったのですが、そういった議論があったのかどうかを知っている方がいたら教えていただきたいです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 大村委員がおっしゃったようなところには気づいていました。

大学生の結果について、フォローしなければいけないのは、これは1 択の設問で、最終的に地域で支え合うがなくなってしまったのですが、3 グループがあって、グループ発表のときには、地域で支え合う要素はどこのグループにも入っていました。ただ、一つだけ選ぶとすればCとかDになったということです。地域で支え合うが彼らの意識から全くなかったということではありませんでした。

なおかつ、行動、意識を変えるの支持が多かったのですが、大雪の日は家に籠もる時間が多いのだから、地域コミュニティにも参加できるよねという発想のアイデアもグループ発表の中にはありました。

市民ワークショップのほうは、例えば、ご高齢の方は町内会活動のお話などもされていたので、そういったところは議論後に地域で支え合うの支持が伸びた要因の一つであると考えております。

○鈴木座長 野田委員、いかがでしょうか。

○野田委員 私も想像していた以上によい結果だったと思います。

将来のシナリオを想定しながら回答するというのは、理解も難しいですし、設問をつくること自体も難しかったと思いますが、すごくうまくつくられていると感じました。そして、皆さんは、理解をされながら、意識も変化しましたし、地域で支え合う点について学生の理解の難しさという問題はあったにせよ、今回のワークショップではT 2 からT 3 には大きく上昇していますので、すごくいい結果だったと思いました。この分析結果から、札幌市民が札幌市自体は自分たちがつくっているのだという意識がかいま見られるような、自治意識が表れたのかなと思いました。

また、マニピュレーションチェックと言うのですが、こちらが伝えた情報が相手にちゃんと伝わっているか、今回議論したことをちゃんと理解したかどうかということについては、アンケートの8 ページの当日の札幌市からの情報提供は分かりやすかったかどうか、それから、雪対策の課題についての理解が深まったかどうかということで、いずれも6 点ぐらいの評価でしたので、非常にうまくいったのではないかと思います。

それから、議論の仕方は僕もそのとおりだと思います。最初に若い人に聞いて、割としゃべりやすい雰囲気をつくって、その次に多世代の議論を行ったので、物おじせずに話せたのではないかと思います。

8 ページに挙がっているのは、5、2、5 と多世代のところの1 点の評価が結構高いという

のはそのとおりだと思うのですけれども、これは100%表示なので、多分、5と書いているのは2人ですね。2と書いているのは1人です。全体で言えば43人中5%というのは2人なので、それぐらいはいるということなのだと思います。他の項目では1点とか2点はあまりついていないのに、多世代のところで幾つかついていたということは、それが悪いというわけではなくて、だからこそ、同世代で議論をした上で、多世代でいろいろな価値観の違いなどを乗り越えていくようなことになったのではないかと思います。

ですから、総じて、すごくいい結果だったのではないかと思います。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

では、私から少し発言したいと思います。

今回のワークショップでは様々な意見が出されたことと思います。これまで市民参加の仕組みづくりについて皆さんと検討してまいりましたが、その中で一番重要なのは、多くの市民から出された意見をいかに政策に反映させていくか、ということにあるかと思います。

そういった中で、検討会としても、ワークショップで出された意見を雪対策審議会にしっかりとご報告いただき、十分に検討していただければと思っています。

また、私の印象に残ったのは、9ページのワークショップで出されたアイデアのうち、「除雪支援が必要な人と支援できる人をアプリ等でマッチングする」という意見が結構多くのグループから出されたということです。これは北大とか北星のワークショップでも出されたわけですが、アプリが使いやすくなったということもあると思うのですけれども、世代にかかわらず、いろいろな方々が自分もできますよという仕組みをつくると、支援が必要な人と支援できる人をうまくつなぎ合わせられるのではないかと思います。

この意見は非常に多く出されたということですので、それだけ市民にとって重要な視点だという表れだと思います。この辺を前向きに少し検討していただければと思っています。

最近の学生はアプリを使いこなしていますが、いろいろなマッチングアプリもあります。例えば、近年、スキマバイトのマッチングする仕組みもありますし、私は以前、地域通貨に関わっていたことがあるのですが、近年のデジタル化によって、地域通貨をまちづくりにうまく活用するというところで、いろいろなところで使われ始めています。

そのような仕組みもうまく取り入れながら、こういったマッチングというのを少し前向きに考えていただけるといいのかなと思います。

以前も申し上げましたが、社会福祉協議会で福祉除雪の制度があると思います。本学の私の授業でも案内して学生の募集をしたこともあるのですが、そのときに学生の声を聞きますと、取り組みは1シーズンですので、責任感からできないときがあったらどうしようなどと、そういうふうにと考えると一歩を踏み出すのを躊躇してしまうことがあるのです。

最近、スキマバイトもありますけれども、「できるときにやる」といいますか、「今だったらできますよ」というのが、学生とか若い人、また、若い人だけではなく、いろいろな世代にとっても参加しやすい形だと思います。私も福祉除雪は少し遠慮していたところもありましたが、できるときはありますので、現代に合った仕組みかと思っています。

雪対策だけでなく、将来的にはまちづくりといいますが、今、栗山町のお手伝いもしているのですが、そちらでは地域通貨の仕組みも始めています。ボランティアをするとポイントが貯まるとか、健康診断やセミナーに参加するとポイントがもらえる、といった仕組みです。いきなりいろいろなところに広げるのは、札幌市ではなかなか難しいかもしれませんが、そういったことも併せて検討していただければと思っています。

必要であれば、後日、資料もご提供しますので、よろしくお願いいたします。

もう一つは、「大学の授業で雪かきをして単位として認定」という意見もありましたが、最近、学業と単位というのはなかなか難しいです。

雪かきをイベント化という話もありましたが、以前、雪はね隊というのをやっていました。ボランティアにイノベーションを起こすということで「ボラベーション」と言っていたのですが、その活動の中でいろいろと研究したことがあります。確か長岡市だったと思いますが、雪かき道場のような取組を行っているのです。

スポーツではありませんけれども、腰を痛めないやり方ですとか、マイスターのような資格制度ですね。そういったことも少し取り入れながら、世界でこれだけ積雪のある大都市は札幌

市だけだと思いますので、そういった中での雪との付き合い方も併せて考えていただければと思います。

また、一つ質問ですけれども、第1回目の会議で持続可能な雪対策について市民の皆さんに理解していただくために情報発信をどのように行っていくのかが課題だという話があったと思います。

今回のアンケートでも、情報提供の重要性といいますか、情報提供が意見の変容に影響を与えるということはあるのですけれども、今回のアンケートやワークショップの結果については広報さっぽろやインスタでも発信されるのだと思いますが、今後、そのほかにこういう情報発信をしていくとか、こういう工夫をしていくなど、何かお考えがあれば教えていただきたいと思います。

○オブザーバー（田村未来創生担当課長） 未来創生担当課長の田村です。

皆様の貴重なご意見をありがとうございました。

今回のワークショップで市民の皆さんからいただいた意見を受け止めて、ワークショップの議論の中でこんなご意見がありましたというのを審議会に報告させていただいて、議論を活発にしていきたいと思っております。

また、審議会の議論も、単にお金や手法だけではなくて、雪とどう共生していくかということも議論の大きなテーマの一つになっておりますので、ボランティアの話や、先端技術の活用なども含めて議論をしていきたいと思っております。

情報発信につきましては、2回目の雪対策審議会を年明け1月の中旬に予定しておりますので、そこでの議論や、いただいたお話をベースに広報に力を入れていきたいと思っております。SNSやウェブなどを使いながら、目に留まるような手法を考えて広報をしたいと思っております。

情報発信の内容について、またご報告できる機会があればと思っておりますので、よろしくお願いします。

○鈴木座長 今回は若者の意見も出されていましたが、若者への情報発信は、今後、認識されているとは思いますが、より効果的に伝わるような情報発信を考えていただければと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

ほかに全体を通して何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 それでは、以上で議題（1）市民ワークショップの結果について終了させていただきます。

ここで、雪対策に係る部署の皆様はご退席ください。

本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

続きまして、次第（2）市民参加を支える仕組みの検討状況について、事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 残り時間が少ないものですから、少し駆け足になるかと思いますが、ご了承ください。

資料2に基づいてご説明させていただきます。

5月に頂戴しました答申において、（仮称）市民サポーターズ制度のご提言をいただいたところ です。

この市民参加を支える仕組みにつきましては、市民サポーターズ制度のほかに、市民ファシリテーターの育成についても検討中でございまして、これについては次回にご報告させていただきたいと考えております。

それでは、資料の左側をご覧ください。

市民サポーターズ制度の概要ですが、皆様ご承知のとおりですので少し割愛させていただきます。目的等の部分で、太字が重要なポイントだと考えておりまして、オンライン上で情報共有や意見提出を行うことのできる環境づくりをする、登録者のモチベーション維持のために様々な形式のインセンティブを用意するというのがポイントと考えているところです。

その下に答申に基づく実施イメージを記載しておりますけれども、まず、様々な媒体でこの制度について周知を図りましてご参加いただくということ、それから、アンケート、市民委員

の公募、ワークショップなどの市民参加に関する情報を配信していく、それから、ご回答などをいただきました結果はの中でフィードバックしまして、回答数などに応じたインセンティブを付与していく流れを想定して検討してきたところです。

続きまして、右側に、現状のデジタルを活用したアンケートの課題と目指す姿を記載しております。先ほど申し上げた実施イメージまでたどり着くにはこうした課題をクリアしていかなければならないと認識しておりまして、具体的には四つの課題を挙げております。

一つ目は、結果を知る機会が少ないということです。

調査をした媒体の中で、必ずしもその結果をお知らせしているわけではないというのが現状です。ホームページや広報さっぽろにおいて周知をしている面はございますけれども、そういった点が課題となっております。

二つ目は、統一的な運用ルールがないということです。

実施の際の基本的な考え方、目的、効果などが未整理で、各部局が独自にアンケートを実施している状況です。

三つ目は、単発的な参加という点ですが、現状は、テーマに関心の高い方にご参加いただいております。その後の参加につながっていないのではないかという課題認識を持っております。

四つ目は、モチベーションの低下などですが、数多くアンケートが届いてしまったり、ほかの通知に埋もれてしまったりという現象が想定されます。あまり回答を要請されると回答疲れのおそれがありますし、各部署において、現状、インセンティブの付与に差がありまして、これは予算の制約もありますが、そうした違いが課題になっております。

一方で、右側の目指す姿につきましては、この裏返しですが、フィードバックを充実させていくこと、共通ルールを構築する、継続的にご参加いただく、モチベーションを維持するための工夫をしていくということを目指していくべきと記載しております。

2 ページ目ですが、今後、実施に向けて検討を進めていくに当たりまして3段階のステップを想定しております。

まず、左側のSTEP 1ですが、できれば今年度中から開始したい取組として、アンケート結果を効果的にフィードバックする工夫の検討、試行というふうに記載しております。

点線の部分ですが、例えば、LINEでアンケートを行う際に、結果の公表方法や時期などを併せてお知らせする、それから、LINE自体で回答結果をフィードバックするというような工夫を検討して試行していきたいと考えております。

続いて、STEP 2ですけれども、来年度以降の取組になろうかと思われそうですが、ガイドラインにおける現行ルールの整理をしていきたいと考えているところです。

来年度中に市民参加の推進ガイドラインの策定を目標としておりますが、その中で、市民参加の観点から、左のフィードバックの強化などの取組を含めまして、各種手法のルールなどをガイドラインの中で整理していきたいと考えております。

この2段階を経まして、最終的にSTEP 3ですが、全庁的な行政サービスのスマート化、DXの流れがございますので、その変化の状況なども踏まえながら、より市民にとって利便性の高い仕組みを構築していきたいと考えているところです。

このように、少し先の長い取組になる可能性はありますけれども、いずれにしましても、より市民にとって利便性が高く、継続的に市政に参加していただけるような仕組みをしっかりと考えていきたいと思っております。

検討状況については、以上でございます。

○鈴木座長 ただいま、（仮称）市民サポーターズ制度の検討状況についてご説明をいただきました。

ただいまのご説明に関しまして、ご意見、ご質問等がございましたらお願いいたします。

○梶井委員 市民サポーターズ制度について、共通のルールをつくって精緻化するにはまだちょっと時間がかかるというご意見でしたが、時間がかかっている間にネット環境のようなものはものすごく変化すると思うのです。例えば、登録者を募っても、ある一定の団体がこぞって登録して自分たちの意見を市政につなげたいということも考えられると思います。それがいい悪いではないですけれども、現状の日本を見ていると、非常に偏った形の登録ということ

も射程に入れておかななくてはいけない、そういう危惧を感じます。市民サポーターズ制度については、これから性格づけが難しくなってくると考えています。

一方で、今回のワークショップのやり方ですが、利便性という視点とは異なる観点で、熟議を経た上で市政にどう参加してもらえるかということを考慮することが重要ではないかと思います。

今回のワークショップのような熟議を経た上での市民意識の反映ということと、利便性の高いアプリなどによる意見の収集、その両方をうまく活用していただきたいと思います。

サイレントマジョリティーというところで、山崎委員から、ワークショップではマジョリティーなのかどうかは分かりませんよねというニュアンスのご意見がありましたが、むしろこれは、サイレントなコモンセンスだと思うのです。マジョリティーであるかどうかは分かりけれども、サイレントなコモンセンスをこのワークショップで抽出したのだと思っています。市民サポーターのサイレントマジョリティーとサイレントなコモンセンスをどういうふう

に市の行政として取り入れていくのか、考えていくのか、そこが重要かと思いました。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

○山崎委員 このサポーターズ制度は、特定の市民を何人か集めてというものではなく、不特定多数の人たちにデジタルを介してサポーターになってもらいたいという案ですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） おっしゃるとおりです。

○山崎委員 そこで、市民自治推進室の仕事を増やすつもりはないのですが、この手のサポーター制度で建設的にやっている他の自治体では、元気のいい市民に実際に集まってもらって、そこで何かを言ってもらったり対話をしたりという集団を形成して政策課題をうまく展開していくということを実践しているので、そうしたことができないのかと考えています。

ごみのリサイクルにおいても、行政が一方的に仕分けをしろとか有料のごみ袋を買えと言うのではなくて、ボランティアな市民たちがそうしたところを買って出て、そこで周知してくれたりという集団が出てくると、非常に建設的な議論が深まって広がってくると思います。

あとは、私が関わっている地方議会でも、例えば議員報酬を引き上げる際に、特定の住民と定期的に、議会とは何か、議員はふだんは何をやっているのかということから始まって、それでは町村の議員の報酬は少ないよね、もうちょっと引き上げてもいいよね、いたずらに定数を減らさなくてもいいよねということを建設的に理解してくれる合意形成を積み上げる、サポーター制度とかモニター制度などコアな人たちと定期的にやり取りをすることによって建設的な議論が深まるし、広がります。そしてまた、不特定多数のサイレントマジョリティーの人たちにもそれを見てもらうということになるとうまくいくようなところがあります。

ですから、いたずらに事務局の仕事を増やすつもりはないけれども、コアな、アナログな人間集団がサポーターズのようになっていくということが非常に大事なのかなということでした。

○鈴木座長 選び方とか、どのような形で進めていくのかというのは、もう少し考えたほうがいいかもしれませんね。

○野田委員 サポーターという表現ですけれども、自治を推進する意味で、アンケートに答えること自体、市民が主体的に自分たちのまちをつくっていくことですので、サポートするという位置づけではないですし、お客さんではなくて、主体であるということと相反する感じに聞こえてしまうなど危惧しました。ただ、参加の仕組みをつくる上でそれをサポートしますということならありかなという気がします。結果としてここで求めているのは、アンケートで何回も意見を言えますよという話ですので、何かをサポートするとか、市民の当然の権利として意見を言える主体であるということから、サポーターという表現はどうなのかという部分がありました。市民参加の枠組みをつくる上でのサポーターということであれば大丈夫ですけれども、その辺が気になりました。

また、特定の団体がということも問題かと思いましたがけれども、数はどれぐらいなのか。例えば、通常の市政モニターでしたら、政令市でも200～300人ぐらいの登録だけで終わるのですけれども、ただのモニターではなくて、ちゃんと盛り上げていくサポーター、例えば、特定の団体という問題を解消しようと思うと、物すごくたくさんの人たちがここに応募できるということでしたら解消できると思います。

もしこの数が少ないのであれば、選定するときに特定の団体ばかりになる場合は遠慮してもらうとか、何か基準が必要になると思いました。

数はどれぐらいのイメージでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今、札幌市でオンラインでアンケートをしたときに数千程度の件数が集まるということから考えますと、委員がおっしゃるとおり、数千人規模、あるいは将来的には数万人に登録していただけるような仕組みにできればとは考えております。

ほかの政令市を見ても、こういったモニター制度みたいなものに何千人が登録されているようなところもありますので、それ以上のものを目指していければと感じております。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

○片山委員 今の野田委員のご指摘ではと気づいたのですが、サポーターとは誰のことを言っているのでしょうか。

札幌市には札幌市市民活動サポートセンターがあって、皆さんが知っている札幌市の顔みたいな場所になっています。私どもの大村と一緒にやっている本学のサークル活動でもここに大変お世話になっているのですが、この市民活動サポートセンターは、札幌で活動しているボランティア、NPO団体を支援するという意味のサポートなので、今回、市民サポーターズとは誰なのかということを確認したいです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 名称につきましては、事務局でも議論があるところでございまして、市政を応援してもらうという意味のサポーターだったのですけれども、アンケートを取る上で、応援してもらうような意見ばかりだとよくないだろう、批判的なご意見も頂戴したいという意味で、現状は仮称とさせていただいております、名称につきましては、今後、いただいたご意見を踏まえて検討していきたいと考えております。

○鈴木座長 ほかに何かございませんか。

細かい点ですが、今回、アンケートの形になって、それをどういう仕組みにするかということもあるのですが、場合によっては、もう少し深掘りして意見を聞きたいとか、場合によってはヒアリングとか、そういう仕組みもあったらいいと思いました。

もう一つは、モチベーションの低下のところにインセンティブとあるのですが、先ほど山崎委員もおっしゃいましたように、ボランティアなところも仕組みとして組み込むといいと思います。

いわゆる予算的な金額もモチベーションにはなりますけれども、例えば、ポイントをためて認定するような仕組みですね。先ほどの話ではないですが、日本人はポイントをためるのが好きという面があるらしいので、その辺をうまく促すようなナッジ理論も入った仕組みが考えられたら面白いのかなと思いました。

ほかに何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 これについては、次回も検討するイメージでよろしいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） サポーターズ制度の議論は今回でまとめさせていただいて、ガイドライン策定の段階で、具体の文言や今後の方向性についてもう少し整理をしたいと考えております。

2. その他

○鈴木座長 ほかに、全体を通して何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

◎閉 会

○鈴木座長 それでは、以上をもちまして検討会を終了させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

以 上